

## パーソナリティ障害傾向における自己・他者・関係性に対する認知の特徴 - 個人の認知過程と対人間の認知過程の検討 -

著者	市川 玲子
発行年	2017
学位授与大学	筑波大学 (University of Tsukuba)
学位授与年度	2016
報告番号	12102甲第8201号
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00147513">http://hdl.handle.net/2241/00147513</a>

氏名	市川 玲子
学位の種類	博士（心理学）
学位記番号	博甲第 8201 号
学位授与年月	平成 29年 3月 24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	パーソナリティ障害傾向における自己・他者・関係性に対する認知の特徴——個人の認知過程と対人間の認知過程の検討——

主査	筑波大学准教授	博士（心理学）	外山 美樹
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	相川 充
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	佐藤 有耕
副査	筑波大学講師	博士（学術）	望月 聡

### 論文の内容の要旨

市川玲子氏の博士学位論文は、パーソナリティ障害傾向における自己や他者、他者との関係性に対する認知と対人関係上の特徴について検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

**（目的）** パーソナリティ障害（PD）は、主に自己の機能障害と他者との関係性における機能障害によって特徴づけられ、その根底には、非柔軟かつ非機能的なスキーマに起因する認知的特徴が存在すると考えられてきた（Beck et al., 2004）。しかし、その概念的な位置づけの曖昧さによって、量的研究に基づいた実証的知見が不足しており、非臨床群における周辺群の理解・援助に資する知見も乏しい（江上, 2013）。そこで著者は、境界性 PD 傾向・自己愛性 PD 傾向・演技性 PD 傾向・依存性 PD 傾向・回避性 PD 傾向における自己や他者、他者との関係性に関する認知と対人関係上の特徴について、個人の認知過程と対人間の認知過程の両側面から包括的に検討することを目的とした。

**（対象と方法）** 著者は、上記の目標を達成するために、研究 1～研究 8 の実証的研究を行った。研究 1-2 を除き、一般大学生を対象とした質問紙調査を実施した。研究 2・研究 6・研究 8 は同性友人ペアを対象としたペア評定式質問紙調査であり、その他は個別自記入式質問紙調査であった。研究 1-2 では、一般大学生・大学院生を対象とし、個別自記入式質問紙調査と潜在連合テストを実施した。臨床群-健常群間の量的連続性を仮定した概念として位置づけ、各個人が有するそれぞれの PD の特徴の程度を「PD 傾向」と定義し、アナログ研究を志向する視点のもとで検討を行った。

**（結果）** 本論文は、3部構成、全7章から構成されている。第Ⅰ部では先行研究の知見を整理し、研究課題ならびに目的を示した（第1章～第3章）。第Ⅱ部（第4章～第6章）では実証的検討を行い、これをもとに第Ⅲ部で総括（第7章）を行っている。

第4章では、各PD傾向と自己および他者に対する評価との関連を検討している。研究1-1および研究1-2では、自己および他者に対する評価的感情との関連を複数の側面から検討している。そして、各PD傾向が全般的な自尊感情だけでなく、対人面に関する自己評価や、自己価値の外的要因への随伴性ともそれぞれ関連することを明らかにした。さらに、自己愛性PD傾向が他者に対する否定的評価感情と強く関連することも明らかにした。研究2では、友人との相互の特性評価の特徴とPD傾向との関連を検討し、境界性PD傾向や回避性PD傾向が高い個人におけるネガティブかつ正確な評価予想や、演技性PD傾向が高い個人における他者評価に対するポジティブバイアス、および依存性PD傾向が高い個人における能力面の評価に関する相対的自己卑下傾向の存在を示した。研究3では、自己や他者に対する評価の背景にある社会的欲求との関連を検討し、自己愛性PD傾向における誇大的態度の背景要因を考察している。

第5章では、各PD傾向と対人関係の質に関する認知との関連を検討している。研究4では、他者との関係性に対する認知の基盤となる対象関係との関連を検討することで、各PD傾向が高い個人における関係性に対する認知の根本的特徴を明らかにした。研究4の結果を踏まえ、研究5では、各PD傾向と他者との関係性に対する欲求との関連を検討するために、2つの研究を実施している。その結果、いずれのPD傾向も特定の友人に対する特徴的な接近-回避欲求と関連し、心理的対処反応との関連性によって明確に区別できることを明らかにした。研究6では、PD傾向と友人間における関係性の認知の差異との関連について検討し、いずれのPD傾向が高い個人も関係性に対する評価において友人との間に差異が見られ、それぞれの対人的不適応性を規定しうる認知バイアスを有することを実証した。

第6章では、ソシオメーター理論(Leary et al., 1995)を踏まえ、PD傾向と自己評価との間の被受容感・被拒絶感の媒介効果を検討している。研究7・研究8より、境界性PD傾向・自己愛性PD傾向・演技性PD傾向・回避性PD傾向が高い個人における自己評価は、一般他者との関係性の質に関する認知に随伴していることが明らかにされたが、依存性PD傾向は被受容感・被拒絶感とは無関連であった。

(考察)以上の知見を踏まえ、著者は以下の3点の結論を示した。まず、各PD傾向と関連する自己評価・関係性の認知の背景にある欲求・葛藤の様相を明らかにし、人の生存における重要な社会的動機・欲求のみでは必ずしも説明されない複雑な動機・欲求の様相を明らかにした。次に、各PD傾向が高い個人が示す、自己評価と他者評価の間の様々なパターンの差異を実証し、自己評価と他者評価との対応関係を明らかにすることで、各PD傾向と関連する内的あるいは社会的に不適応的な様式を説明することが可能になることを示した。最後に、境界性PD傾向・自己愛性PD傾向・演技性PD傾向・回避性PD傾向が高い個人の自己評価には、他者との関係性の質に対する認知が寄与することを明らかにした。

## 審査の結果の要旨

(批評)5つのPD傾向をとりあげ、それらの自己や他者、他者との関係性に対する認知や対人関係上の特徴について詳細に検討した研究である。アナログ研究として多くのデータに基づき、5つのPD傾向の個人の認知過程と対人間の認知過程に関する理論的な枠組みを提供しており、学術的意義だけでなく臨床的意義のある論文と評価された。

平成29年1月27日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(心理学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。